

境六二)は、太陽神という神格の曖昧さを指摘する。また、坂田道生「古代ローマの犠牲式概観」(『バルテノン神殿の造営目的に関する美術史的研究』平成一九—二年度科研費報告書)は、美術史の観点から犠牲式図像を解説してくれる。美術史の分野では、この他、長田年弘「アレクサンダロス・モザイク解説試論」(『カリエント』五三—一)がボンベイ出土の有名なモザイクに前六世紀以来のギリシア美術の枠組みから解釈を施している。

建築史では、堀賀貴「古代ローマの建築(五)」(『古代文化』六二—四)の連載が続いている他、堀らによる『日本建築学会研究報告』(九州支部・計画系五〇—一)所収のオスティアの建築学的調査もある。この都市の特色を考える上で参考すべき成果と言え、毛利晶「オスティア」(『歴史と地理』六四六)と併せてお勧めしたい。G・ヴァレンツィアーノ(児嶋由枝訳)「アケイレイア総大司教座聖堂」(『上智史学』五六)は、遺跡の重要性に比して邦語での紹介が限られる中では貴重なもの。V・ハート／P・ヒックス(桑木野幸司訳)『バラーティオのローマ』(白水社)も興味深い。新しい英語版の翻訳という形ながら、本文はイタリア語原文からの訳で安心できる。ルネサンス期の古代ローマ理解という意味では、N・マキアヴェッリ(永井三明訳)『ト・イスコルシーローマ史論』(『ちくま学芸文庫』)の文庫化もある。社会史ではK・W・ヴァーバー(小竹澄栄訳)『古代ローマ生活事典』(みすず書房)の着眼点が広く、「事典」とはいえ面白い。E・S・P・リコッティ(武谷なおみ訳)『古代ローマの饗宴』(講談社学術文庫)も文庫化された。

経済史では、Sadao ITO, "Evidence, Theories and the Ancient Economy" (JASCA, 1)が、M・I・フィンリー以来の古代経済史の動向を的確に論じている。伊藤も指摘するように古代研究で考古学の果たす役割は大きく、我が国の研究者による成果も増加している。青柳正規を中心とする東京大学のチームが二〇〇二年から進めソノマ・ヴェスヴィアーナの発掘は継続的に行われ、その成果は、Masanori AOYAGI et al., "La cd. Villa di Augusto a Somma Vesuviana (NA) alla luce delle più recenti ricerche archeologiche (campagne di scavo 2002-2008)" (AMOENITAS I, 2010) と Tomoo MUKAI et al., "Nota preliminare sui materiali ceramici rinvenuti nel corso delle campagne di scavo 2002-2007 nella "Villa di Augusto" a Somma Vesuviana" (同)に詳しく述べる。『遺跡学研究』八号にも「ソノマ・ヴェスヴィアーナにおける遺跡調査の一〇年」という特集があり、学際的な調査による興味深い知見を得てくれる。立教大学のトルコでの調査も始まり、「史苑」七一号に浦野聰、師尾晶子による報告がある。

文献史料の翻訳としては、キケロ(吉原達也訳)『カエキーナ弁護論』(11)(11・完)、(『広島法學』二五一—二)、ホラティウス(池田黎太郎訳)『歌集』(『Studia Classica』1)、スエトニウス(原賢治・大谷哲・小坂俊介訳)『文法家・修辞家列伝』(同)、エウトロピウス(エウトロピウス研究会訳)『首都創建以来の略史』翻訳(第七卷) (『上智史学』五六)があつた。

ソノマやオスティア、トルコ等、歴史研究者も参加した考古学者のつよいイニシアチブを感じる。

このところ、今後の西洋史研究のあり方についての意見表明をしばしば目にするようになった。ひとつは世界史、グローバルヒストリー、ヨーラシア史といった枠組みにおいてヨーロッパをどのように位置づけていくのか。もうひとつは日本における学術行政、高等教育、教養文化のなかで西洋史学という特殊日本的な学問分野はどうのように振る舞っていくべきなのか。西洋中世史学にとってもそれぞれ重要な論点であることは認めるが、学問を取り巻く環境がいかに変わろうとも、先行研究の整理、問題点の発見、史料解説、新知見の提示という歴史学の作法そのものに変化があるわけではない。

そのような作法の集成として、博士論文に基づいた堅実な研究書が立て続けに刊行されたことは喜ばしい。故五十嵐修『王国・教会・帝国』(知泉書館、二〇一〇)、青谷秀紀『記憶のなかのベルギー中世』(京大出版会)、轟木広太郎『戦うことと裁くこと』

アと切り離されたかたちでの日本固有の西洋史学などあるはずもない。日本語で書かれたものであれ欧語で書かれたものであれ、同じ研究史のなかで議論され評価されなければならないし、世界のアカデミアに成果を提示するためには、それが「西洋史」学である以上、事実上の共通言語である英独仏（伊）語で、可能な限り多くの研究者の目にふれる媒体に執筆されねばならない。昨年の成果トコト、Hirokazu Tsurushima, "Hic Est Miles: some images of three knights, Turbold, Wadard and Vital" (Michael J. Lewis et al. eds., *The Bayeux Tapestry: New Approach*, Oxbow Books, Oxford), Hiroshi Takayama, "Frederick II's Crusade" (*Mediterranean Historical Review*, 25-2), Sakae Tange, "À propos des « chartes d'affection de biens » pendant le règne de Charles le Chauve" (*Revue Belge de Philologie et d'histoire*, 89)。So Nakaya, "La giustizia civile a Lucca nella prima metà del XIV secolo" (*Archivio storico italiano*, 630)を得た。日本人の人文学者として最高度の学的質を世界のアカデミアに投下したのは、古代テクストの読み替えという観点から「科学革命」へと至る從来の思想道程を根本的に書き換えた Hiro Hirai, *Medical Humanism and Natural Philosophy* (Brill, Leiden) である。

最後に成果公開について。研究は読まれ、議論され、選別され、新しい歴史像を生み出す糧となつて初めて意味を持つ。この点、すべての刊行物をウェブ上で公開している北海道大学スラブ研究センターや九州大学の西欧中世史料論研究会の試みは参考になる。

とめた「ブルゴーニュ国家における財政システムの形成」(『社会経済史学』七七一一)では、集権的制度の整備はいかにして可能であったか、という藤井美男の問題提起を受け、まず花田洋一郎「十四世紀後半フランス王国及びブルゴーニュ公領の財務官僚ニコラ・ド・フォントゥネ」が、高い実務能力を持ち集権的統治に貢献する都市エリートの姿を描きだす。続く中堀博司「製塙所グランド・ソヌリ長官ジャン・ショザの活動」は、公国財政に占める製塙業の位置を一財務官僚の経歴のなかに読み取る。最後に畠奈保美「フランドルにおける援助金の交渉と徵収」は、フランドル伯領への援助金課税が領内で分担・徵収される過程をたどり、とで、地域社会の自律性が君主権力によって蚕食されていく様子を明らかにする。いずれも「近代国家生成」の比較史的検討に寄与する好論である。

史料論を通じて実証的歴史学の再構築をめざす『西欧中世文書の史料論的研究』(代表・岡崎敦平、平成二三年度研究成果年次報告書)と、ローランを通じた合意形成のメカニズムに前近代社会の歴史的特質を探る「紛争・秩序」(略称)、二つの科研費報告書は興味深い報告と討議を多く含み、以下のように個々の研究者たちの論文にはすでに協働の効果が現れてきている。今後こうした成果を、欧米の学界に向け全体としてのようにならんに発信していくのか、大いに注目したい。共同研究としては、早稲田大学「ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所」による『エクフラシス・ヨーロッパ文化研究』の創刊も特筆される。研究入門書として佐藤彰一・中野隆生編『フランス史研究入門』(山川出版社)が刊行さ

同様に、COEプログラム、大型科研、付属研究所なども、関係者以外にはアクセスの難しい知的成果を可能な限り大学リポジトリなどに登録し、世界に向けて公開すべきである。(小澤 実)

西欧・南欧

本欄に関係する単行本では、学位論文を発展させた轟木広太郎『戦つことと裁くこと』と青谷秀紀『記憶のなかのベルギー中世』の二つが大きな成果である。前者は中世フランスの紛争解決システムが持つ柔軟性と持続性を指摘し、後者は中世の歴史叙述に記された領邦意識や民族意識の多様性を明らかにする。また小池寿子『内臓の発見』(筑摩書房)は、解剖学的人体が数多く描かれるようになった中世後期における人間精神の変容を問う刺激的な著作。水野千依『イメージの地層』は、歴史人類学的手法を用いて聖像や肖像などルネサンス期の図像文化を読み直そうとする意欲作である。これらの作品は、隣接する学問分野との方法論的対話を経て、中世史研究が少しずつ、しかし確実に変化していることを実感させる。他方で渡辺節夫編『統合と調整』(略称)は、歴史学の底力を示す論集。収録論文は個別に紹介するが、伝統的な研究視角と近年の方法論を融合させ、裁判・議会・王国といった諸権力機関の生成と展開を、複層的な利害関係の調整統合過程として実証的に解明する。

共同研究の豊かな成果が学術雑誌の特集や科研費報告書からうかがえる。社会経済史学会大会のパネル・ディスカッションをま

れた。加納修「フランク時代」および佐藤彰一「カベー朝からヴァロワ朝へ」には研究動向を代表する内外の文献が網羅的に記載されており、有益である。以下、個別論文を時代・地域別に紹介した後、特定のテーマに関するものをまとめて取り上げる。

初期中世に関して、奈良澤由美「マルセイユの古代末期から初期中世の教会遺構」(『西洋中世研究』三〇)は、五世紀から七世紀のマルセイユにおける教会建築に「東方的」な要素を見いだし、汎地中海的な文化交流の在り方を探る。メロヴィング朝については、加納修「Un acte perdu de《mainbour》de Clovis IV en faveur d'Ingramnus」(HERSETEC, 4-1)が、国王が俗人に発給した証書を「マルクルフ書式集」を手がかりに分析し、王による多様な権利保護の実態を描き出す。カロリング期に関しては、王文書を読み上げる際の「音」に着目する梅津教孝「カロリング王文書はどういうに読まれていたのか」(『西洋史學論集』四九)が興味深い。また丹下栄「A propos des « chartes d'affection de biens » pendant le règne de Charles le Chauve」(*Revue Belge de Philologie et d'histoire*, 89)は「財産割当文書」と呼ばれる王文書が、カロリング末期の王国統治を背景に実務資料として作成された可能性を探る。津田拓郎「九世紀末～一〇世紀初頭のフランク王国における王国集会・教会会議」(『ヨーロッパ文化史研究』二二)は、カロリング末期の王国統治を肯定的に評価する最近の動向に沿って、王国レヴェルの「集会」が継続的に開催されていたことを指摘する。創建期のクリュニー修道院における書記たちの活動に地域社会とのつながりをみるの